

在米時代の宮城與徳とその周辺群像：孤高の移民画家の肖像

比屋根，照夫 / ヒヤネ，テルオ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

353

(終了ページ / End Page)

365

(発行年 / Year)

2015-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010709>

在米時代の宮城與徳とその周辺群像

——孤高の移民画家の肖像

比屋根 照夫

(一)

本論は「戦争と革命の時代」と言われる二〇世紀の初頭、北米西海岸一帯（ロサンゼルス、サンフランシスコ）に渡った沖繩移民青年群像の希望と挫折の「物語」を、「在米時代の宮城與徳とその周辺群像」と題して報告する。沖繩の先進的な青年群像は、この激動の時代に三つの国家体制に抵抗し、それに翻弄され、それぞれ非業・非命の運命を遂げた。與徳はファシズム体制下の日本でゾルゲ機関の中心人物の一人として逮捕され、拷問のすえに獄死。一方、與徳の同志たち、照屋忠盛・宮城与三郎・島正栄・又吉淳・山城次郎らはロングビーチ事件で米官憲に逮捕され、亡命地として彼等自身が選択した「労働者の祖国」ソ連で、照屋以外は無残にもスパイ容疑で銃殺刑に処せられた。

これらの事実には、我々は二〇世紀初頭の二〇年代、自由と解放の夢を描いた沖繩人移民青年群像が、米国の冷徹な資本主義体制・日本の軍国主義・ファシズム体制・ソ連の肅清国家体制など三つ国家体制に包囲され、いかに無残な運命を辿ったかを明瞭に見る事が出来る。しかし、沖繩にとってゾルゲ事件と宮城與徳の問題は、決して単なる歴史

上の問題ではない。「日米同盟」神話を至上命題とし、一切の軍事機能が沖縄に集中される現在、「反戦平和」・「反植民地主義」「反帝国主義」の旗印を高々と掲げた宮城與徳らの運動は、まさに今日に継承されるべき思想的遺産である。

とは言え、宮城與徳らこれら沖縄青年の問題は単にこのような運動史的な位置づけだけではすまない大きな問題をはらんでいる。米国人にもなれなく、日本人としても扱われなかった沖縄人移民、沖縄移民青年――。彼らはそうした「受苦」を背負いながら一九二〇年代初頭、沖縄移民青年を中心にロサンゼルスで「黎明会」を結成、それを母体にして被抑圧者、弱者の解放を目指す運動を展開して行った。そこに、差別と疎外の「受苦」を背負い、この時代を駆け抜けた沖縄人青年の生き様を見ることができよう。

以下、宮城とその周辺群像に触れながら、宮城與徳のロサンゼルスにおける文芸復興期の活動からこの報告を始めたと思う。

(一)

「黒炎の作者彦山禎吉氏がきた。これを機として黒炎会はここでも生まれる。血の滲み出る生命の芸術に触れた友は来て呉れると嬉しい。……彦山氏の芸術は単なる技巧や生易しいアカデミックの芸術ではない。それは燃える火の様な、総てを焼き尽さねばやまない急進的熱情の表現だ。革命の芸術だ。」（『羅府新報』一九二四年

一〇月二二日）

これは宮城與徳が二〇年代初頭に書いたエッセイの一節である。この時、宮城與徳・二〇代前半、沖縄から兄與整

をたよって北米に移住、この間、カリフォルニア美術学校、サンディエゴ美術学校などで画学生としての修業を積み、與徳自身の内面から絵画に対する爆発的な感情が堰を切って流れ出ようとする頃であった。冒頭の若々しく、みずみずしい一文は、まさにこうした與徳の絵画表現の前途を予告するものであり、一九二〇年代の南加（南カリフォルニア）画壇に登場を告げる声でもあった。

彦山禎吉画伯の来羅に際して催された歓迎会は、直原敏平、上山鳥城男、幸徳死影夫妻、三好峰人夫妻、藤川幽子、上野赤春、岡村眸子鳥、松原眸など一〇数名が出席して開かれ、宮城與徳もこれに参席した。與徳が冒頭の一文で言う「黒炎会」の結成は、これら出席者を中心として結成された。黒炎会はもとより永続的な芸術団体ではなく、特異な版画家・彦山禎吉の版画展を羅府（ロサンゼルス）市内で開催する目的で結成されたものであった。そして與徳はこれらの羅府発起人を代表して黒炎会開催の意義を冒頭に引用したように「急進的熱情」のほとばしり出る一文で公表したのであった。

それにしても、彦山禎吉画伯の歓迎会に列席し、黒炎会のメンバーとなったこれらの人々をみると、若き與徳がいかに多彩な人間群像と交流を始めていたかがわかる。ここでそのことを証明するため、この会合に出席した主要人物の履歴を簡単にふれてみよう。直原敏平は元自由民権運動に参加した壮士。明治二〇年代前後に自由党の壮士として三大建白事件の渦中にあつて活動した。自由民権運動に挫折した後、直原は一転して当時の政治青年がひとしなみに抱いた夢を、自由の新天地、アメリカに求め、炎熱の地アップランドに入植した。

渡米した直原はアップランドを中心にさまざまな農園・キャンプでの重労働に従事、辛酸をなめ尽した。日本人労働者排斥とキャンプへの白人労働者による襲撃等々。アップランドに居住すること一〇余年、さまざまな人生を経験した直原は、やがて文芸生活に入り、一九一〇年代の後半、雑誌『レモン帳』を出版した。この頃から直原は世俗的なものとの交流を一切たち、文明の世界から身を遠ざけ、仙人同様の生活を送るようになり、その超俗的な姿勢

は南加の日本人移民社会に異彩を放つ存在となった。

政治から実業へ、実業から文芸生活、瞑想的な生活への転身。直原の波瀾にとんだ人生はこうして静謐、隠遁のアップランドの生活へとたどりついた。それと同時に彼の周辺には、南加の画家、詩人、歌人などの芸術家たちが集まるようになり、直原は古き良き南加の文芸復興期を象徴する人物となる。栄達、功利をはなれた脱俗的な直原の行動、言動は、彼をとりかこむ日本人移民社会の人々の善意とあたたかい愛情にはぐくまれた。南カリフォルニアの明るい日差しの下で織りなされるそうした人間模様は、南加文芸復興期のもっとも美しい光景の一つである。

直原敏平と宮城與徳との世代、年齢をこえたほのぼのとした友情、人間的な交流もその一つである。與徳にとって、直原はまた八巻千代との若き日の恋の決死的な逃避行にあたたかい救いの手を差し伸べ、恋の逃亡者たちに隠れ家をも提供してくれた人物でもあった。與徳は老いたる詩人・瞑想家をこよなく愛し、直原もまたこの青年画家の才能を愛し、その思想にも理解を示した。長い放浪の人生の果てに病に臥した晩年の直原をソーテルの自宅に引きとり、手厚く看病したのは與徳・千代夫妻であり、この老詩人に示した親愛の情のあらわれであった。

こうして、羅府の文芸復興期に異彩を放った直原敏平は、宮城與徳・千代夫妻、三好峰人・清子夫妻、藤川幽子、関谷京香、片井溪巖子、ドクトル仲谷など親しい画家や文人たちにかこまれて波瀾の人生を閉じたのであったが、自由民権運動の壮士から一転して渡米する詳細な経緯については多数の資料が存在する。與徳の人生の折々に飄然として立ちあらわれる直原敏平とは、與徳の生涯を彩る「芸術」と「政治」のはざまを彷徨する精神の象徴のように思えてならない。

だが、これまでロサンゼルス文芸復興期に特異な脱俗的な人物としてのみ論じられきた直原が、排日移民法案に対して最も根源的な日本国家論・日本人論を展開していた事は全く知られていない。直原の排日法案に対する議論を見る時、外在的にそれを単に批判するというよりも、内在的に朝鮮を植民地化した日本の国家体質を批判しながら、移民者としての日本人はどう生きるべきか、と問うている所にその言論のユニークな側面が表れている。直原は当時の日本人排斥問題に触れながらその問題の本質にこう迫る。

「日本人は今排斥に苦しんでゐるのだが、朝鮮人は今亡国の恨みに死んでも足りない苦しみをしてゐるのだ、排斥に幾百倍の苦しみである」

排日問題を単に日本人に向けられた民族差別問題として捉えるのではなく、直原は排日の苦しみを抱える今こそ、日本の過酷な植民地支配下にある朝鮮人の苦悩を思へ、と問いかける。

「わが同胞よ、日本人よ、それほど排斥が苦しく排斥から身を遁れたいと願うならば、よろしく朝鮮を朝鮮に返し、青島を支那に返し、南洋諸島を誰にても欲しき人に与へ、陸海軍を解散して壮丁を父母にかえし、言論集会出版の自由を許し、国家の安心立命を陸の上に海の上に林の如く打ち立つべきである」

排日問題とは、直原にとつてまさに近代以降の日本国家のあり方に係わる重要な問題としてここに表明されている。日韓併合に象徴される日本の軍事的な膨張主義、拡張主義、そして更に第一次大戦を契機とする中国への軍事的進出、ドイツ領南洋諸島の割譲――目をうちに転ずれば、国家主義、軍国主義の高まりの中で言論・集会・出版へ

の抑圧が進み、日本の前途に暗雲が立ち込める。直原はこうした状況を踏まえ、日本が内外のすべての抑圧を自ら打破し、あらゆる意味で「自由」な国になった時、はじめて日本は米国のみならず国際社会からの排日、排斥の声から解放されると主張する。

こうして直原は「亡国の恨み」に喘ぐ朝鮮への植民地支配を廃止して独立させ、日本の対外進出の象徴たる青島領有を止めて中国に返還し、南洋群島の領有を放棄すること——これが直原の日本改革の構想であつた。更に、国内的には陸海軍の解体、徴兵制の撤廃、言論・集会・出版の自由の保障によつて「国家の安心立命」を陸海上に樹立することであつた。国内外の国家的政策をこのように根本から転換し、このことを国際社会に広く闡明にすることによつて始めて日本は国際的な信頼を勝ちえ、米国における排日・排斥問題の呪縛から解き放たれると直原は考えた。後年直原と宮城與徳が思想的にも精神的にも深く結び付いた背景はここにあつた。

このように、一九二〇年代初頭に結成された黒炎会のメンバーをみると直原敏平をはじめとして異色多様な人物群像に與徳が取り囲まれていたことがわかる。そのうちのもう一人の人物が洋画家幸徳死影である。

死影はペンネーム、本名は幸衛。幸徳幸衛は明治社会主義者の代表的な人物であり、明治政治史上の暗黒を象徴する、「大逆事件」で処刑された秋水幸徳伝次郎の実兄亀治の長男。秋水とは叔父、甥の關係にあたる。死影は一九〇六年来、秋水らとともに渡米。秋水の思想上の転換期となるこの時期に秋水に同行してシャトル、サンフランシスコ、オークランド、バークレーを転々とする。この間、死影はバークレー美術学校に入学、一九〇七年六月、秋水の帰国をサンフランシスコで見送り、彼は一人絵画研究のため米国に残る。

幸徳死影がロサンゼルスに住むようになるのは、おそらく一九一〇年後半からであろう。一九二〇年代初頭には、ロス日本人社会でも将来を嘱望された青年画家として知られるようになる。この頃、秋水の渡米の直接的なきっかけを作った旧平民社桑港支部のメンバーの一人岡繁樹ら五〇余名の出席のもと、幸徳死影と高橋松子との結婚披露宴が

ロス日本人街三光楼で盛大に行われた。そして、この披露宴をとりしきる司会の役をつとめたのがあの直原敏平であつた。

幸徳死影のロスでの活躍は上山鳥城男、上野赤春、三好峰人らとともに結成した初期の絵画集団嚇土社しゃどくしゃを中心に展開され、天才的素質と技量を多分に備えている青年画家として羅府画壇でも高い評価を得た。だが、生来の自己破壊的な傾向をひきずり、放浪癖にとりつかれていた死影は、一九二〇年代の後半、絵画研究のためパリへ留学し、ロスを去る。以後、ロスに再びもどることもなく、アメリカの妻子からも離別され、一九三八年、大阪で窮乏のうちに死去、遂に画家として大成することもなかった。こうして黒炎会につどった直原敏平、幸徳死影などこれまで歴史の闇の中に埋もれていた人物群像を一つ一つ解きほぐして與徳とつなげて行くと、そこに人生の様々な重みや挫折を背負った人間の生き様がくつきりと浮かび上がって来る。

直原敏平はかつて壮士、政治青年として自らの青春をかけた自由民権運動の挫折を背負い、幸徳死影は天皇暗殺のフレイム・アップのもと、「大逆事件」で謀殺された『国賊』大逆人『秋水の死の影を背負っていた。自由民権運動、明治社会主義運動が歴史にきざんだ重みを背負った人間群像は、それぞれの青春をひきずりながら日本を離脱し、異境の地で身を寄せ合うようにして思想、芸術、文芸の交流の輪を広げていく。與徳の周辺にはこのように多種多彩な人物群像がいたということは、與徳研究の出発点になる重要な事実である。

(四)

一方、與徳には沖縄人移民青年としての根強い連帯感・一体感にもとづく文芸・思想活動の場があつた。在米沖縄人青年達のリーダー的存在であつた屋部憲伝を中心として結成された「黎明会」がそれである。ロシア革命後の世界

情勢の変動が、当時の沖縄人青年達をいかに突き動かし、「黎明会」結成に至ったかについて憲伝の論文「在米沖縄県人概史」（『琉球』第五号、一九三八年六月）は次のように述べている。

「前述の如く県人青年は労働者として抜群の感があつたが、彼等は亦、世界文化の変遷、時代思潮等に対しても決して無関心で居る事が出来なかつた。当時欧州大戦終局を告げ、人類は其政治、哲学、芸術等文化の再清算をなすべき一大転換期に立つて居た。殊に北欧ロシアに於てソビエト連邦の出現は確かに全世界プロレタリアートに一大警鐘となり、プロレタリア運動、プロレタリア文化建設の思想は実に全世界を揺り動かして居た。こふ言ふ世界思潮は亦移民地に於て意義ある生活に憧れて居た敏感な県人青年労働者の心にも浸潤して来ずには居なかつた。羅府県人青年には又吉淳、屋部憲伝、幸地新政等を先輩として喜屋（屋）森篠、照屋忠盛、松田仁吉、大城善貞、渡口政郷、同政信、仲村幸輝、山城大佐、宮城與徳等の青年達が居つたが彼等の中で屋部は一人妻帯し家庭を持つて居たので彼等青年も自然其の家庭を中心にして集る様になつた。（中略）彼等はそこで良く読み、良く論じて以つて一年中の知識欲をよく冬期間に満たして居たが、然し農園働きの豪の者達も市内労働にはサツバリ要領を得ず、為めに其の共同生活は経済的には頗る惨澹たる處があつた。一九二一年、之等の青年を中心として羅府にれいめい、会を組織した。毎週土曜日の晩、バンニング街玉城長四郎経営のホテルに会合して哲学、宗教、科学、芸術、社会問題等を研究した」

屋部憲伝の論文にはロシア革命の成功が移民地の沖縄人青年達にどのような影響を与えたかが生々と語られている。何よりも憲伝らの「黎明会」がロシア革命後、数年えいめいのうちに結成されていることがそのことを如実に物語っている。この「黎明会」の結成から彼らが共同経営した「アウル」設立に至る経緯については、私の手元にその

中心メンバーであった故幸地新政、仲村信義の詳細な書簡がある。この「黎明会」の結成こそロスにおける文化・社会運動の濫觴であつた。しかも、この会が屋部憲伝を中心とする沖縄人移民青年達によつて結成された意義は、強調してもし過ぎることはない。実際、この進歩的な「黎明会」の結成は日本人移民社会にも大きな反響をよび、それに加わる進歩的青年が続出した。後に、アメリカから追放され、ソ連へと脱出した日本人移民青年の多くはこの会から輩出している事からしても、「黎明会」の存在がいかに大きな物であつたかが推測出来る。

それはともあれ、会のメンバーはいずれも一九一〇年代から二〇年代にかけて沖縄からアメリカに移民した二〇歳の青年達であり、学歴も師範学校、農林学校、中学校を出た当時の沖縄で最高の教養を身につけた知識層の青年達であつた。宮城與徳がゾルゲ事件で逮捕された後にその自供書の中で、自己の精神形成について、次のように述べていることは注目すべきである。

「……二百年以来島津への屈服による民族的疲へい頽廢又明治初年廢藩置県以後に於ける歴代官僚の半植民地的彈圧政治（沖縄に於ける官僚閥族の横暴は著名なものである）及び内地特に鹿児島資本の無茶な搾取、自然に恵まれず、又政治的にも恵まれない蘇鉄地獄と称され働く者の喰へない社会、精神的に寄り処のない社会への祖父の批判、教育は私に社会的関心を持たせたものがあると思ひます」（検事訊問調査）

沖縄に対する差別と抑圧の歴史が自己の精神形成、社会的関心への原点となつたとする與徳の体験は、「黎明会」に集つた屋部憲伝以下の青年達が共有した体験であつたと見ていい。とりわけ、一九二四年の排日法の制定は、彼等をふくむ日系移民一世の生活を直撃し、苛酷な生活を強られる結果となつた。排日移民法によつて、官吏、旅行者、学生、商業貿易等の非移民の一時入国は認められたものの、土地所有権さえも奪われ、両親、妻子の呼び寄せさえも

禁止された。自由の天地アメリカに夢と希望を託した憲伝らの絶望は深かった。憲伝自身の次の一文はそうした心情をよく示している。

「ああ、日本人は今や土地所有は愚、親子夫妻の同棲の権までも制限され、独身者は其結婚の自由までも奪われてしまつた。正義、自由、平等を国是とする米国に於て、斯くして日本人は自滅せよと云ふのであらうか。ああ、可憐なる日本人第一世よ！若き血と力によつて荒漠たる加州の地は緑滴たる沃野と化した。而して、努力まさに実らんとする時、彼等は其成果を無爲の資本家地主の手にゆだねて、小屋と道具を車に載せて、ガタガタ馬車に揺られつつ諸々に転転する生活を送らねばならなかつたのだ。永住土着とは誰が言つたことであらうか、土着を禁じられ、近親と断たれ、而も永住を余儀なく強られて居る一世の魂こそ、落付く場所もなく永遠に迷ふて消え行く一片の迷ひ雲の如きか！前途は光明か、暗黒か、ひたすらに只伸び行く、二世等の双肩にある。地を継ぐ者よ、幸あれ！」（『琉球』第五号、一九三八年六月）

荒漠たるカリフォルニアの大地を日本人一世移民達が営々と耕して「緑滴たる沃野」へと変えた努力も空しく、排日移民法によつてそれらの土地さえも「無爲の資本家地主の手」にゆだねざるを得なかつた無念の思い、「一世の魂」の叫びが伝わる憲伝の一文である。

黎明会の結成が排日移民法制定の数年前である所などを勘案してみると、その結成は当時、すでに露わになりつつあつた排日移民の動向と無縁であつたとは思われない。なぜならば、憲伝らカリフォルニアに参集した青年達もまた一世移民と同様に「落ちつく場所もなく永遠に迷ふて消え行く一片の迷ひ雲の如き」存在であつたからである。

こうした体験をもつ沖繩人青年達がアメリカに渡り、沖繩人、東洋人への差別と圧迫、資本主義社会の矛盾に目覚

め、ロシア革命の影響をうけて、社会主義思想に徐々に傾斜していったとしても不思議ではない。その意味で、「黎明会」とそのメンバーによる共同出資店「アウル」は、自由と平等への志向を抱く沖縄青年達が南カリフォルニアに樹立した最初の小さなコンミュニオンであったのだ。

こうして、ロシア革命の強烈な衝撃をうけて結成された屋部憲伝、宮城與徳らの「黎明会」には、たんに沖縄人移民青年達のみならず、彼らと同じ思いを抱く先進的な移民青年達が加わるようになる。その中に福永麦人、箱森改造、堀内鉄治らもいた。福永、箱森は後にロングビーチ事件で、堀内は別件でいずれも国外退去となり、ソ連へ渡った。沖縄人移民青年達の小さな読書サークルからスタートした「黎明会」は、様々な移民青年達を吸収しながら、やがてより実践的、急進的な方向を目指す社会問題研究会、階級戦社へと分化していく。

この過程で、鮮明にマルクス主義の旗をかけた福永、箱守、堀内らのグループと屋部憲伝、又吉淳、宮城與徳らとの対立があり、麦人らは「黎明会」をぬけ出る形で新しい組織へと移行することになるが、この経緯については與徳の「自供書」に詳しく述べられている。階戦社に依拠する麦人らは、一九二九年の大恐慌から一九三〇年代初頭にかけて、激しい街頭行動や日系労働者などのストライキを指導し、しばしば逮捕、投獄された。そして、一九三二年一月のロングビーチ事件の勃発と事態は決定的な局面へと急展開していく。

この事件で、麦人らとともに島正栄、又吉淳、宮城與三郎、照屋忠盛、山城次郎ら五人が逮捕されたことは、ロサンゼルス沖縄人社会に大きな衝撃を与えた。彼らはいずれも米国政府から「好ましからざる移民」として、本国へ強制送還される運命にあったが、それを拒否、法廷闘争で自由出国を勝ち取り、一九三二年秋、ソ連へと亡命した。

(五)

他方、ロサンゼルスにおける活動を経て、與徳は一九三三年、「密命」を帯びて帰国、ゾルゲ機関へと合流、非法活動に入る。以後の與徳の活動の大部分は、二〇世紀の社会を新しく作り変えるという壮大な夢とビジョンに支えられたものであった。

その中で与徳はそうした夢と希望に向かってゾルゲ、尾崎秀実などの同士とともに歩んだ。与徳はこの事件の中でも最も底辺の部分に位置し、民衆に最も近い場所にいた。それゆえに与徳の情報活動は、国家的な「秘密」にかかわるものというよりも、労働争議や軍事情報、当時の日本社会の一般民衆の状況を反映したものが多し。それらの情報はゾルゲの日本勢分析に大きく貢献したことは、ゾルゲ自身が認めている所だ。それほどに当時の與徳のファシズム社会の分析・情報収集は綿密を極めたものであった。

そのような日本社会の底辺の情報活動を通して與徳が目撃したのは、まさに、日本社会が音をたてて戦争にばく進んでゆく時代の歯車だったわけである。彼はそれを見つづ、こうした戦争へと向かうファシシヨ的潮流を阻止しようと最大限の力をそそいだ。同時に抑圧されたアジアの解放を与徳は尾崎と同様に痛切に希求していた。与徳は欧米諸国、日本による「東洋民族に対する非人道的圧迫」に痛憤し、中国における「苦力くくりの無くなる時代のために働く」と述べアジアへの連帯を痛切に訴えた。その意味で、與徳のアジア・中国論こそ彼の思想の真髄であると強調されるべきだ。そこに與徳の在米時代の思想活動の延長線を我々は見届ける事が出来る。このように、與徳たちが残した平和への願いを現代沖縄でどのように継承し、発展させていく努力こそ今後の我々に残された課題である。

付記…本稿は二〇一一年一〇月二日、沖縄大学地域研究所と日露研究センター共催で開催された第6回ゾルゲ事件シンポジウム

ム「ゾルゲ事件と宮城與徳を巡る人々」での報告をもとに、若干の修正を行い、資料的に新たに補正したものである。なを、本論との関係で、拙論「羅府の時代―宮城與徳と南加青年群像」(『新沖縄文学』八十九号、一九九一年九月発行、以下)を参照されたい。